

妊娠女性の抗うつ薬（選択的セロトニン再取り込み阻害薬）と先天異常の関連について

Nishigori *et al.* Selective serotonin reuptake inhibitors and risk of major congenital anomalies for pregnancies in Japan: A nationwide birth cohort study of the Japan Environment and Children's Study. *Congenital Anomalies*. 2017;5(3):72-78. doi: [10.1111/cga.12202](https://doi.org/10.1111/cga.12202).



【はじめに】

妊婦の約3%にうつ病や不安障害のリスクがあると言われています。海外の研究では、妊娠中に抗うつ薬である選択的セロトニン再取り込み阻害薬(SSRI)を服用した母親から生まれた子には先天的な異常が高いことが示されています。しかしながら、日本での調査は十分ではありません。本研究では、全国規模の調査データを使って妊娠中のSSRIの服用と子の先天異常との関連を解析しました。

【調査項目】

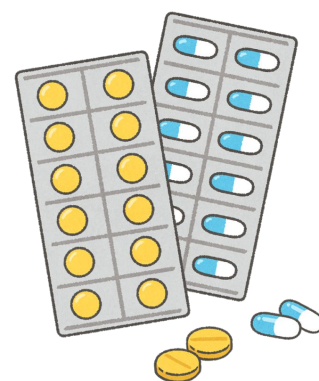
全国15か所のエコチル調査センターに登録した95,994名の妊婦を対象としました。質問への回答から得られた薬物の服用や生活習慣の情報などを用いて、統計学的な解析を行いました。

【結果】

		合計(人)	泌尿生殖系の先天異常(人)	オッズ比
SSRIの服用	なし	95,822	1261	1
	あり	172	8	3.227

95,994名中、妊娠判明から妊娠12週頃までSSRIを服用した妊婦は172名でした。統計解析の結果、SSRIを服用した場合、服用しない場合と比べて産まれてきた子の泌尿生殖器系の先天異常リスクが高くなりました（オッズ比 3.227）。

※オッズ比：ある事象の起こりやすさを2つの群で比べたもので、数字が大きいほど事象が起こりやすいことを示します。この場合、事象は「泌尿生殖器系の先天異常」を指します。



【この調査でわかったこと】

日本全国規模の調査により、妊娠が確認されてから妊娠12週目までのSSRIの服用は、産まれてくる子の泌尿生殖器異常の発生率の増加と関連する可能性が示されました。発症リスクの高い先天異常の種類、服用したSSRIの細かい分類や摂取量など、さらに詳細な調査が行われることが必要です。